

第3回学術研究大会

テーマ 「生きる意味への援助 ～その原点をふりかえる～」

会期 2009年10月4日(日)

会場 ウィリング横浜

大会長 原 敬(利根中央病院 緩和ケア診療科長・緩和ケアチーム
NPO 法人対人援助・スピリチュアルケア研究会副理事長)

学術研究大会に向けて

「現代日本社会の高齢化の進展とともに、病院や高齢者福祉施設における患者や施設利用者の疾病、症状の重篤化が進む環境のもと、医療・福祉施設においては更なる援助スタッフの質の向上、技術の高度化が求められている。(設立の趣旨より)」。この社会で暮らすわたしたちは、患者・家族としてそれを求め期待し、援助提供者としてそれを担っていかうとしています。ここでは、求めそして担おうとする<質と技術>とはいったいどのようなものであるのか、さらには、その<向上と高度化>がどのように可能かが探究され、実践の場に適用できる形で提供されることが不可欠です。本研究会の目的は「スピリチュアルケアを含む対人援助の考え方と方法【村田理論】を、医療、福祉や教育の分野に普及し、現場を支援し、協力することにより、対人援助専門職の技術水準の向上、次世代人材の育成を推進する」ことでこれに応えることにあります。

2006年に設立された本研究会の活動によって、医療や福祉にとどまらず、苦しみにある人の暮らすさまざまな場に<援助>の概念と方法が広がってきたことはたいへん喜ばしいことです。しかし、こういっただけだからこそしばし足を止め、わたしたちのめざす援助の原点を見つめなおしてみたいと思いました。大会テーマを「生きる意味への援助 ～その原点をふりかえる～」としたのは、ふりかえりの機会としてこの大会をとらえたいと思うからです。これからの進路を決めるには、これまで辿ってきた道を地図で確認し、いま立っている地点を知らないとならないからです。「援助とはなにをどうすることか」という解法へのまなざしにとどまることなく、「援助とはなににか」さらに「わたしにとって援助とはなににか」という素朴な問いを糸口にして、相手の痛みだけでなく自らの痛みにも向きあう大会にしたいと願っています。稔りある討論を期待します。

NPO法人対人援助・スピリチュアルケア研究会

副理事長 原 孝

大会プログラム

※所属は大会開催当時のものです

一般演題

「痛みはどうか。痛み止めは効きますか」との質問に「それが嫌だ」と言われた一例
岩城孝和(利根中央病院 外科・緩和ケアチーム)

「高齢者へのスピリチュアルケア ～傾聴ボランティアとしてのかかわり～」
木村知子(傾聴ボランティア・神奈川傾聴塾)

「教育現場における対人援助論を基盤とした支持的スーパービジョンの活用について」
斎藤友子(立命館アジア太平洋大学)

座長 原田直美(鎌倉市地域包括支援センターふれあいの泉 管理者・保健師)
的場康徳(鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科)

講演 I

「どんな私たちであれば、援助者になるのか？」

講師 小澤 竹俊(めぐみ在宅クリニック 院長)

座長 藤平和吉(利根中央病院 精神科・緩和ケアチーム 医師)

講演 II

「生きる意味を回復するために」—対人援助を社会的に読み解く—

講師 浅川達人(明治学院大学社会学部 教授)

座長 村田久行(京都ノートルダム女子大学 教授)

パネルディスカッション

「生きる意味への援助～会話記録から検討するスピリチュアルペインとそのケア～」

パネリスト

亀井由美(高槻赤十字病院 看護師)

國廣崇(鶴巻温泉病院 医師)

新行内健一(利根中央病院薬剤部 かんわチーム)

谷口照子(傾聴ボランティア・神奈川傾聴塾)

座長 村田 久行(京都ノートルダム女子大学 教授)

提題 原 敬(利根中央病院 緩和ケア診療科長・緩和ケアチーム)

学術研究大会を終えて

第3回 学術研究大会(2009 横浜)を了えて

生きる意味への援助の原点を振り返ることにより、対人援助・スピリチュアルケアの実践と研究を目的とするこの研究会の新たな方向性を模索する機会にしたい。これがこの会の目標でした。この試みは多くの方々のおちからで達成されたと思っています。登壇された方々と参加されたみなさまの双方に、対人援助についての新たな視点を持ち帰っていただけたと思うからです。

岩城氏、木村氏、斎藤氏のご発表への反響はきわめて大きかったように思いました。単に質疑応答が活発だったにとどまらず、質疑を通じて発表者と質問者双方の〈まなざし〉が明らかになっていったからです。双方のやりとりがお互いの反応を呼び覚ますコミュニケーションこそが〈援助への入り口〉であり、参加者にとっても新たな発見があったのではないのでしょうか。

講演は、参加者からも高い評価を得られました。小澤先生(講演 I)は医療における「援助の現場」に充満する無力感に苦しむ援助者への援助の必重要性を訴え、会場に熱風を巻き起こされました。浅川先生(講演 II)は社会学の立場から、「対人援助の現場」を価値論の視点でとらえ

直して見せ、新鮮な議論の軸を提示されました。新たなものの見方によって、対人援助に関するわれわれ自身の探究心が十分に励起されました。

〈会話記録〉は、本研究会が対人関係性と援助の検証に使用してきたツールであり、事例検討の題材にもこれを使用しました。今回新たに設けた「読み手」の声に耳を傾けることで、自分自身が記録者であるという〈臨場〉を味わえたのではないかと思います。手軽な結論を導くでもなく、安易にまとめるでもない。そして、啓発的な教育を施すでもないパネルディスカッションの試みは、企画者として満足のいくものでした。しかし、本会へはじめて参加された方々は、この方法と専門用語に戸惑われたかもしれません。専門性は技術と言語によって裏付けられるものでもありますが、このあたりは参加者のご批判を仰ぎたいと考えています。

関東の地ではじめての開催になった本大会の企画運営に参画されたみなさま、研究会本部事務局、そしてなにより、ご参集くださったみなさまに深謝いたします。お陰さまで質の高い研究大会になり、恙なく了えることができました。

第3回学術研究大会長 原 敬